

銭湯における「遊び」の要素の研究

Research of the element of "play" in a public bath

1K08B180-3

藤野 功

指導教員 主査 寒川 恒夫先生

副査 石井 昌幸先生

【目的】

日本人が生活の習慣として古くから行っている入浴という行為は、日本の風土に合った独特の文化である。そのような入浴文化の中でも、約 900 年前の平安時代から存在し、江戸時代に広まった銭湯は、長年日本人に愛され、その時代における風俗や時代背景を反映させてきた誇るべき文化である。しかし、近年では内湯の普及とともに日本時の入浴スタイルが変容し、銭湯はその数を減らしている。このように既存の銭湯施設が厳しい状況にあるなかで、衛生のためだけではなく「遊び」としての入浴を提供する施設と考えられるスーパー銭湯が誕生し、その数を急激に増やしている。また、江戸期の銭湯もこの「遊び」としての入浴を主目的とした施設であると考えられ、共通点がみられると考えられる。よって、これらの施設に着目し、内包されると考えられる「遊び」の要素を、フィールドワーク調査、文献調査によって抽出し、衰退をみせる既存の銭湯施設の現状を分析した上で、その状況改善にむけ、方向性を導き出すということが本研究の主たる目的である。

【研究方法】

文献調査において、江戸時期における銭湯の「遊び」の要素を抽出すると同時に、スーパー銭湯が持つと仮定される「遊び」の要素を明らかにするためにフィールドワーク調査を行った。本研究においての調査対象は、株式会社ホットネスが運営する「お風呂の王様 東久留米店」とした。合わせて、株式会社ホットネスの小林徹氏にインタビュー調査を行った。

【結果】

江戸時期の銭湯においての湯屋の娯楽施設化は、浴室施設以外の点に求められることがわかった。江戸期での銭湯・湯屋は、まず、男風呂と女風呂の垣根がなく、混浴であった。そこでは男女が共に湯に浸かり、一日の汗を流すことによって、文字通り「裸の付き合い」をして入浴を楽しんでいた。また、湯屋には男性の入浴の流しから髪結い、衣服の世話をする「湯女」と呼ばれる女性が存在した。湯女が現れたのは室町後期、湯女の全盛期は江戸期であると

言われている。また「遊び」の要素はこの湯女風呂が取り締まられた後の二階風呂からも窺うことができる。「二階風呂」とは、男湯の 2 階を入浴後に休息できるスペースとして提供した形の湯屋のことで、囲碁や将棋を客同士で楽しむ町内のレジャーランド、あるいは雑談を交わしあう、当時のサロンの機能を果たしていたと考えられる。

スーパー銭湯を対象にしたフィールドワークからは、スーパー銭湯は経営的視点からではあるが、単なる衛生のための入浴ではなく、遊びとして入浴を提供することを狙いとしている施設であるということが明らかになった。また、現在では、利用客のニーズが長時間滞在へと移り変わっており、そのニーズを満たすために数多くの工夫がなされた施設ということであった。なかでも、お休み処など休息がとれるスペースが十分に確保されており、こういったスペースは、入浴し終わった利用客が体を休めるといった利用目的のほか、会話を楽しみながら時間を過ごすことに利用されており、江戸時期の銭湯における二階風呂のような社交場的な役割を担っていることが判明した。

【結論】

本研究では、江戸期における銭湯と、現代におけるスーパー銭湯に「遊び」の要素という共通点を見出し、その抽出を試みたが、浴室の設備については相違がみられたものの、浴室外の部分で、入浴施設に楽しみを求め、利用しているという点に類似性がみられた。そして、既存の銭湯施設が利用客の減少により、経営状況が悪化しているにも関わらず、スーパー銭湯という新興の入浴施設が人気を博しているということを鑑みると、スーパー銭湯においては「遊び」という要素を取り入れていることが特徴であり、やはり銭湯の復興には、この「遊び」の要素を取り入れていくことが必要不可欠であると考えられる。

また、現代の銭湯において、すでにさまざまな方法で「遊び」の要素を取り入れている事例も存在する。これらの先行事例を参考にすることが重要だと考える。